

# 黒崎の今昔

## 新聞からたどる黒崎の歴史 (六十)

### 双葉山、羽黒山から大相撲大野巡業まで

当時の大野には二十軒の料理屋があり、力道山、若乃花、神風などが宿泊した。

(先月号からの続き)

したがって、力道山の闊脇として巡業できた期間は、昭和二十五年の五月から同年の九月初めまでの三ヶ月しかないようである。

また、この昭和二十五年大相撲大野興業説を裏付けるようなエピソードを、力道山を泊めた二之町の料理屋松次樓(現大松、宮野二郎さん、昭和十四年生)さんから聞いた。宮野さんも力道山が家に泊まった正確な年は分からないが、内芸妓の人たちが女将さんに、「力道山に乱暴された」と泣きながら訴えるのを見たという。自分たちの持ってきた大きな座布団を何枚も重ねた上に座って、泣き叫ぶ芸妓さんを両手に抱いて遊んだり、とにかく傍若無人な力道山だったようで、二郎さんのお母さんが、きかん坊で困ったものだとかぼしていた。松次樓での常軌を逸したような、力道山の行動から、前記の事情で引退を目前にしたあせりのようなものが感じられる。

◎大関・佐賀ノ花一行が仲町の新湯屋(現細田博一さん、昭和

六年生)に泊まったのは博一さんが十六、七歳の頃だった。当時、新湯屋は天然ガスを料理の煮炊きに使っていたが、相撲の若い衆たちが鍋に鶏肉やこんぶなどを入れ、ガス火でとろとろと長時間をかけて、味の濃い煮しめのようなものを作っていたという。博一さんのお母さんが、「どうして牛肉や豚肉を食べないの」と聞いたら、「牛や豚は四本足で、四つんばいだから食べない」と若い衆が答えたという。このころの力士は、牛肉や豚肉は食べなかったのだろうか。それは、現代の力士が牛肉でも豚肉でもなんでも食べるのを見れば、百三十五キロで最重量級といわれた当時の力士と、今日幕内の平均体重百五十キロ、最重量級二百キロ時代の力士との体重差は、この力士の食べ物によるところが大きいのではなからうか。

◎前頭若乃花(初代若乃花、後の横綱、元日本相撲協会理事長)一行が栄町の一寸亭に泊まった時、長男の大塚久治さんが十一歳位で、若乃花の泊まったことは覚えているが、後は余り分

らないという。

また、大野の名妓さんとして知られる家塚屋のきん子さんと、同じく見晴屋の幸代さんが、二人で栄町の一寸亭へ夜、遊びながら風呂をもらい(風呂へ入り)に行っていた時、急に若乃花たちお相撲さんが帰ってきて、風呂に入るのもそこそこで大急ぎで逃げ帰った思い出があるという。

◎前頭十勝岩が諏訪町の料理屋岩野屋に泊まった。当時、大野町は相撲が盛んで、暖かくなる」と諏訪神社の相撲場で毎晩のように夜遅くまで稽古をしていた。そんな元氣な若者の小熊一男さん、石原政弘さん、大沢栄治さん、浅妻長次郎さんらが、「お相撲さんの所へ遊びに行こう」ということになり、何かお



外人レスラーを空手チョップで倒す力道山

菓子を買って岩野屋に泊まっていた十勝岩の所へ夜、遊びに行つた。十勝岩は喜んで会つてくれ、次のような話をしてくれた。「わしは北海道の貧しい家の出身だが、相撲とりになつて身を立てようと海を渡り、汽車に初めて乗つてみた。相撲の稽古はきびしいが、やり抜くつもりだ」と。

◎小結神風一行は八区の料理屋姥ヶ山樓(現かつば寿司、白井弘さん、昭和十年生)に泊まった。

◎小結広瀬川一行は仲町の料理屋だんごや(現高橋石男さん、昭和十三年生)に泊まった。だんごやに泊まったお相撲さんも、四つ足の肉は食べなかったという。小学生だった石男さんは、「下っぱのお相撲さんが料理をしているのを見たが、四つ足の肉は一切食べず、にわとりや、鴨など二本足のものを食べ、にわとりや鴨を買ってくる、自分たちで料理していた。にわとりを、血を流しながらこしらえているのを見て気持ちが悪くなつた」といつている。

◎前頭大内山(又は大内)一行は七区の料理屋元春の家(現好春、高橋ハルノさん)に泊まった。大内山も不動岩と同じくとても背の高い、やせてあごのしやくれた力士だったと

いう。好春の親戚の石男さんは、大内山が家の向かい側のがん木の中に入ろうとしているのを見たが、首を曲げてかがむようにしているのにびつくりしたという。

当時の大野には、二十軒からの料理屋があったので、柏戸、不動岩、大ノ海などかなり知られた力士もまだ大勢来て宿泊していると思われるが、残念ながら分からなかった。

### エピソード

内山仁太郎さんは、前にも記した通り、大野の草相撲で鳴らした人である。太平洋戦争の時、内山さんは海軍の魚雷艇に乗っていた。その時、同じ船に十六歳の通信兵某少年が乗っていた。内山さんは海軍でも相撲をとっていたが、その少年が相撲の話になると夢中になるので聞いたら、姉さんが大相撲の柏戸の奥さんになっているということだった。その柏戸関が大野に来たというところで、内山さんがこの話をしてくれた。

また、お相撲さんの大半が二之町の鶴ノ湯に入りに行った。たまたま、現在中学通りの浅妻力さんが入り行ったら、力道山が入っていた。見ていたら、湯からあがった力道山は、すっかりとタオルの上に腰をおろして座り、両手と両足をのばしてじっとしているのを三、四人もの下っぱの力士が一生懸命にくっついていったという。

(続く)